

デフォルトとしての宮澤保夫

井 上 一

デフォルトとしての宮澤保夫

宮澤保夫について書くことは非常に難しい。宮澤が共感とともに観ていたのは目の前の子どもであり、教育を含めた社会というシステムであり、日本であり、世界だった。マクロな視座でミクロにあたり、ミクロな体験からマクロを回った。駄文を重ねる必要もなく、当然に多くの方が宮澤を稀有な存在と讃え、宮澤自身も「人間絶滅種」という表現を好んだ。多くの賛辞が宮澤に集まった。一方、私自身はそれを当然のことと思ひ、それゆえにちょっとした違和感を感じながら、それらのことを声高に語る人たちを眺めていた。なぜなのだろうと考えてみた。だって彼は宮澤保夫だ、そのように生きる人間なのだ。鳥が空を飛ぶのだ！と言っているようなものだ。宮澤が逝去して、なるほどと気づいた。父親がいない私にとって、母親以外の大人という存在のデフォルト（初期設定）が宮澤保夫だったのだ。

9歳の時に初めて出会った塾の先生で、亡くなるまで48年間お世話になった。文字に落とすと数文字にすぎないけれど、実際に振り返れば長い。宮澤も20代半ばから70代を走り切った。担任の先生も、近所のおじさんも次第に遠い存在になっていったが、私が傍でずっと見ていた大人の男性は宮澤だった。あの大きな目で、背中で、横顔で、言葉で、匂いで、触感で、気配で常にメッセージを発しながら、宮澤は今この瞬間もずっと私に存在中だ。子どもの頃から「大人＝宮澤」で、「どう生きるのか」「仕事とは何か」を目の前で実践し導く存在だった。だから、迂闊にも私は「大人」も「どう生きるのか」も「仕事とは何か」も宮澤が示してくれたままに、そういうものだとはハナから思っていた。ところが世間はそうではなかった。あのような人間は大変に珍しいのだ。あのような生き方はできるものではないのだ。そして星槎の建学の精神に代表されるような仕事の捉え方は実は一般的ではないのだ。「私にとっての普通」は「世間の普通」ではなかった。宮澤がデフォルトであった私が、他人の言葉にちょっとした違和感を感じていたのは、そういう理由だった。

もう一人の宮澤保夫

塾に加え、様々な事業が始まって仕事の幅が広がってきた頃、宮澤は「何人もの宮澤保夫がいるんだ」と言っていた。おそらく彼を知る人間には「それぞれの宮澤保夫」がいるに違いない。立志伝の宮澤、楽しい宮澤、畏怖される宮澤、お酒を飲んで想像を遥かに超えた親和力を発揮する宮澤、オープンカーで颯爽とサイパンをドライブする宮澤、玉川学園の池のカッパ事件で授業中に笑わせてくれる宮澤、ミニチュアダックスフントの愛娘口を抱っこしている宮澤、一晩中無線機に向かって呼びかけ続ける宮澤、出張先の海外で朝6時になると必ず「起きてるかあ」と部屋に入ってくる宮澤、テレビのチャンネルを次から次へと変える宮澤、休む間もなくかけまくる電話魔の宮澤、日本語だろうが英語だろうが言葉の持つ力とはかくも強力なものかと周囲を一気に巻き込む宮澤、学校設置の見通しが立ち六本木で

飲みすぎて何度も電話をかけてくる私に「わかった、わかった。タクシーで帰ってこい」と優しく言ってくれた海外帰りで疲労困憊の宮澤、炭を整えて上等な肉を丁寧に焼いてくれるやっちゃん。全て宮澤保夫だ。

皇帝ナポレオンが文豪ゲーテに会い「ここに人間がいる」と表現した。もう少し身近な意味合いで、私は「宮澤保夫は『人間』だった」と表現したい。類い稀な成功を収めながらも、悩みもし、失敗もし、反省もし、足掻きもし、苦しんで、病とも戦い、それでも楽しみ、愛し、人のために立ち上がって、わざわざ辛い方の道を選んで、最悪の事態に備える。それを物凄い振幅の中で堂々とやってのける。頑固さは天下一品だ。でも同時にいつも内面で悩み揺らいでいる。「心は揺らぐだろ」と言っていた。揺らぐ中で判断をしなければならないのが、最も大変で重要な仕事だったのかもしれない。

捨て身で突っ込む

子どものためには捨て身になれる人だった。社会のルールや決まりごとに縛られずに感じ、考え、アドレナリンを全開にして突っ込んでいく。走りながら論理を整理する。「叱るときはまずは感情で叱っていい、その後で理性に落としていくんだ」とツルセミで宮澤から教わった。情熱が言葉や声、行動に光を与えるんだと。創設の物語によく見る「感情を全面に押し出しながら、突っ込んでいく」ことは、なんの後ろ盾も持たない宮澤にとって、その必要があるからだ。法律や社会のルールが子どもを苦しめているなら、理詰めで入れれば当然に足止めを食らう。四方八方から論理的に固められた要塞が相手だから当然だ。宮澤は突っ込みながら論理的に突破する道を選び開くことにかけては天才だ。同時に勉強家だし、努力家だった。幾多の革新的な発想は他人が後から口にするのは簡単だ。でも走りながら、呼吸を乱しながら、罵詈雑言を浴びながら、不十分な確信しか持てない中で構想し、戦いを挑んでいくのは尋常ではない。目の前の子どものためになんとしても社会を変えるのだというレベルの意志がなければ到底できない。だから普通は誰もできない。

「組織の意思決定で大切なのは何が正しいかではない。誰が決めるかが大事なんだ。その場面になったら、覚悟を決めてお前が決める」と教わった。宮澤の生き様を見ればわかる。初めてぶつかる壁に対して判断をしなければならないときは、当然に不十分な確信しか持ちようがない。だから、根拠のない自信でカバーし、信念で強く前進するしかないのだ。これは壁を破り、創り、率いる人間の覚悟だと知った。

教えてくれない先生

私にとって宮澤は世の中がどうなっているのかを教えてくれる塾の先生だった。でもある時点から宮澤は教えてくれない先生になった。社会人として働き出してからは、基本的なことを聞いても決して教えてくれなかった。だから耳をそば立てて言葉を集め、メモして、悩んで調べて追いかけた。背中はずかるばかりだったけれど、追いかけた。

今振り返って考えるとわかる。教えたらできるようにはならないのだ。自分で悩み、ぶつかり、苦勞して、失敗をして初めて経験が血となり肉となる。教えてしまったらそのことはわかるが、条件や環境が変わったら役に立たなくなる。宮澤自身がそうやって身につけてきた。時が流れて今、若い人たちに「教えてほしい」と頼まれた時に逡巡する自分がある。

破壊力

言葉に破壊力が潜んでいた。ある時、サイパンからのお客様と食事をしていた時、宮澤が発する言葉にそのお客様方が心を動かされ、涙を流し、宮澤の言葉はなぜこのように強く自分に訴えてくるのだろうかと眩いていた。日本語だろうが、英語だろうが、宮澤の声色、音程、抑揚、ワーディングが徒党を組んで相手の心をこじ開けて、宮澤の思いをねじ込んでいく。この言葉の破壊力が人から人へつながり、影響を与えてきた。宮澤の声は塾で教えていた若い時から時代を経るにしたがい変わっていった。でもその全ての声が魅力的だ。あの金切り声で、あの怒った声で、あの優しい声で多くの人たちの心が動く言葉を運んでくれた。もちろん私はそのシャワーを浴びた一人で、いまだに全身ずぶ濡れだ。

複雑な組織図

「グループの組織図を書いてみろ」と指示を受けたのは平成の初期、宮澤グループという名前を使い始めたときだ。本部という機能を真ん中に置き、その周囲にツルセミ、ピーターパン幼稚園、宮澤学園高等部、横浜国際福祉専門学校を配置した。その間の空白をつなぐ事業を色々と想像しながら、「まだまだこんなことができますね」と言うと、「だろう？ やらなきゃならないことが見えてくるだろう」と答えてくれて、組織図を作ること自体が楽しかった。その後星槎グループと名前を変え、さまざまな苦境を乗り越えながら、学校の数も多くなって成長していった。NPOや一般社団法人や公益財団法人、農業生産法人、医療法人、外部連携団体なども生まれた。そして星槎の組織図がわかりにくいなあという言葉が聞くようになった。それはそうだ、あの組織図は宮澤のシナプス回路（脳神経組織）の一部を二次元に投影したものだ。すべては子どもたちのためにという宮澤の意志の一部をなんとか紙に落としたものだ。だから、わかりやすくしてたまるか。私はいつもそのように思っていた。

仲間

厳しい人だった。けれども厳しさの裏で深い優しさを持つ人だった。時には扉を閉ざして私の話は全く受け付けてくれない時期もあった。プレハブの小屋を執務室としてあまり人と会わなくなった時は、そのドアの外で何時間も待って、なんとか5分だけ話をさせてもらったこともあった。仕事の上で厳しい言葉を投げても、その裏でフォローを忘れない。怒られても「あなたは大切な自分の仲間だ」となんとなく伝わってくる。口ではそこまで言うかというくらい厳しいことを言っても、自らは仲間を切ることができない人だった。これは古くから働いている人間ならみんな知っている。その意味ではとてもわかりやすい人だった。

星槎の三つの約束と人間の本能

ある国の人権問題が大きなニュースとなっていったとき、宮澤が「俺はあの国に乗り込んでいって奴らと戦う。そのうちテレビの画面の中で旗振って戦っているかもしれないぞ」と言っていた。この人ならやりかねないな、どうしたらいいかなとそれなりの心の準備をそっとしたのを覚えている。イデオロギーよりも民族というものを大切にす人だった。

日本大学名誉教授で外科医の林成之先生の研究室でお話をうかがったとき、人間の本能には「生きたい」「知りたい」「仲間になりたい」が含まれていると聞いて、宮澤がいう星槿の理念と同じだと感激した。「生きたい」と「知りたい」が組み合うと「科学」、 「知りたい」と「仲間になりたい」が組み合うと「文化」、そして「生きたい」と「仲間になりたい」が組み合うと「宗教」が生まれると考えると歴史の見え方も少し変わってくる。

そしてさらに考えてみた。この本能だけでは、人は争う。これは歴史を振り返ると明らかだ。だから、この本能を良く表出させる作法を身につける必要がある。それが「人を認める」「人を排除しない」「仲間を作る」という「心の耕作」なのだ勝手に理解した。「人を認める」と「人を排除しない」と組み合うと「ダイバーシティ」になる。「人を排除しない」と「仲間を作る」が組み合うと「インクルージョン」になる。「人を認める」と「仲間を作る」が組み合うと「知繋（宮澤の造語、知って繋がる）」となる。星槿の三つの約束とは、そのままでは争いを避け難い人間の本能を前提とした「心の耕作」の必要性を謳ったものなのだ。人間が生活していく上で不可欠な要素である「科学」「文化」「宗教」と、その前提にある「生きたい」「知りたい」「仲間になりたい」という人間の本能を、あなたはどのように育み、いかに表出していくのかという問いに対する星槿の指針が三つの約束であり、星槿の全人教育の柱として重要な意味を持つものなのだろう。それを日々の活動の中に織り込んでいくことで初めて、私なりに捉える宮澤の遺志たる星槿の活動がつながっていくのだ。

宮澤保夫に育てられた人間

宮澤に育てられた人間は数多い。私は48年間もの長い間関わってもらった。そして育てられた。この事実が宮澤と私の関係の全てであり、それ以上でもそれ以下でもないのだと思う。いろいろな話を聞かせてくれて、いろいろな場面を見せてくれて、いろいろな経験をさせてくれた。「俺はお前の人生に大きな影響を与える人間だ」と中学生の時に言われた。その後、私は中学校で大きな騒動を起こしてしまうことになるのだが。大人になってから私はよく宮澤に冗談でこう言っていた。「私は問題だらけなんですけど、それは師匠の責任ってことですよね」。いつも二人で大笑いした。

感謝

「人とは、その人がいままでの人生の中で会った、全ての人の総和である」という。実際、私の中の人生観・仕事観・発想・行動・言葉遣いなどの至る所に宮澤を感じる。競争、効率、差別的優位、生き残り、ステイタスなどが我が物顔で正論として渦巻いている時代に「みんながもっともっと幸せに生きることができる社会を創りたい」という、ややもすれば「青臭い」と捉えられる考え方を堂々と言う人間に私がなれたのは、宮澤のおかげである。そしてそのベクトルのうちに仕事をさせてもらえたのも宮澤のおかげである。人との関わり方、「彼女」の話、高校大学受験、職業選択、結婚など人生のいくつかの節目で、何気ないやりとりや膝詰めで交わす二人だけの会話の中で、方向性やヒントを示してくれたのも宮澤だ。どのような言葉でも表現し尽くせない感謝の想いで一杯だ。「人からいただいた財産は人のために使うものだ」と宮澤はよく言っていた。これからの人生において、場面や方法、手段や対象は変わっていったとしても、宮澤に分けてもらった私の中にある財産は人のため、社会のために使っていきたい。ありがとうございます、先生。